第3号
平成4年
4月1日

題字
植木　満支部長

東進

発行所
土浦一高東進会
茨城県立土浦一高
進修同窓会
東京支部

事務局　〒101 東京都千代田区神田神保町2-14　朝日神保町プラザ801号
千代田法律会計事務所内　☎03-3262-0310　FAX 03-3262-0648

旧　正　面　玄　関（昭和51年　国の重要文化財指定）

撮影　オギタ　秀（第15回卒）

平成四年度 土浦一高東進会 総会にご参加を！

平成四年度の土浦一高東進会の総会が次の通り開催されます。

『日　時』
平成四年六月六日（土曜日）
十二時から十五時

『会　場』
東京プリンスホテル
（港区芝公園三―三―一）

会費　男性・一万円
女性・八千円
（年会費二千円含む）

様々な企画を予定しておりますが、ご要望等がありましたら、是非各学年幹事・支部幹事又は事務局までご連絡ください。

※　例年のように卒業年次ごとにグループ分けしますので、同期の方を一人でも多くお誘い下さい。クラス会気分で楽しめます。

母校の現況

平成三年度の土浦一高の運動部の活躍の一部と平成二年度の卒業生の進学状況について紹介します。

先ず、野球部ですが第二号でもお伝えしましたが、一回戦江戸川学園に十四対三で勝ち、二回戦土浦日大には九対五で惜しくも敗れてしまいました。

陸上部の佐藤真剛君（三年）が三千メートル障害で全国大会出場し決勝戦まで進みました。

ヨット部は前年同様関東大会まで進み日頃の練習の成果を披露しました。

バトミントン部も関東大会に出場し活躍しました。

次に、平成三年度の卒業生の進学状況についてみますと、東大には二十二名が合格し、内十七名が現役、又、筑波大には五十二名合格、内四十五名が現役でありました。

私立大でも早稲田大四十一名、慶応大二十七名の現役合格と新記録だったようです。

最近五年間の東大合格者数を書いておきます。（　）内は現役合格者数

六十一年	十二名	（　九名）
六十二年	二十名	（十五名）
六十三年	二十一名	（十三名）
平成元年	二十五名	（十九名）
平成二年	二十七名	（二十名）
平成三年	二十二名	（十七名）

いつまで校歌が歌えるかな

沃野一望　数百里

関八州の重鎮とて……

初老の男達が肩を組みながら声を張り上げていた。老眼になって歌詞は目から離しているものの、どの男達も中学時代の顔になっていた。

昭和十九年、戦争のまっただ中に卒業した仲間から「秋陽日々に更まり紫峰碧空に愈々鮮烈たり……」という手紙が届いた。つまりは同窓会をやるから来いということだった。

久し振りに土浦を訪れてびっくりさせられたのは、街の変わりようであった。

賑やかだった祇園町の頭上には道路が重くのしかかり、商店の姿も昔の面影はなくなっている。ビルが建つのは仕方のないことだが、何か無計画な街作りがされていたような気がした。

昔の面影を求めて街を歩いていると向こうから手をあげながら近付いてくる男がいた。同窓会のために柏から来た級友だった。彼も街があまりにも変わりすぎてさっぱりわからないと言っていた。

卒業して四十数年もたてば浦島太郎になっても仕方のないことであろう。

街の変貌も大きなものだが、母校周辺もずいぶん変わっていた。我々が在校中に滑空部（グライダー部）ができ校庭で練習をしたものだが、今行ってみると、こんな所でよくグライダーを飛ばすことが出来たなと思うほど狭い感じがした。飛びすぎて不時着した隣の桑畑も今は立派な住宅地になっていた。かって校門を出て坂を下って行く途中に、今川焼を売っている古ぼけた店があり、よく買い食いをしたものだが、そこも住宅が建ち並び店はなくなっていた。

街の様子こそ変わってしまったが、歩き回っているうちに気分は何時の間にか四十数年をタイム・スリップして中学生に戻ってしまい、向こうからセーラー服の高女の女学生が歩いてくるような気分にさせられた。

中学時代といえば、数学の時間に難しい質問を考えてくる奴がいて、先生を困らせたりした。先生がその質問の解答を考えている間は、教室中は休み時間同様になり、数学の苦手な者には楽しい時間だった。

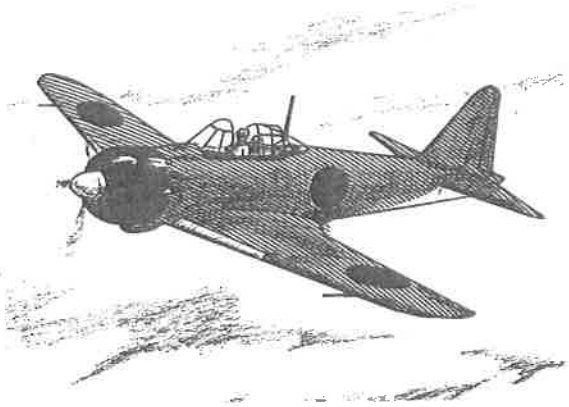
しかし、今の学校教育にこんな余裕があるだろうか、なんでも卒業してからその先生にうかがってみたら、我々の魂胆をご存じだったというのだから楽しい話である。

思えば戦争の最中にもかかわらず、好きな女学生に胸をときめかせたり、霞ヶ浦にボートを浮かべて芋をかじったり、押し入れの中でレコードを聴いたり、楽しい青春時代であった。

思い出を噛み締めながらおとずれた同窓会場には懐かしい顔ぶれが揃っていたが、タイム・スリップしたまま会ったせいか昔の仲間というより、昨日教室で一緒だったというような気分にさせられた。

何時間かの会が終わり、土産に買った焼ワカサギをぶらさげて駅に向かう耳には、さっきまで大声で歌っていた校歌が響いていた。

（昭和十九年卒　植木　和男）



開戦時、世界一の名機であったゼロ戦　　丘の上病院　根本伊佐夫画

「学徒動員」の思い出

昭和二三年卒　延島　信也
丘の上病院院長

大東亜戦争の風雲急を告げる昭和一九年一一月、私たちは、県立土浦中学校（旧制）二年生で、学徒動員の命を受け、土浦市郊外の荒川沖にあった霞ヶ浦海軍航空隊に隣接する第一海軍航空廠に就業した。

学窓を去るに当って担任の宇野悦郎先生は、最終講義の国語の時間に、心境を短歌に託す課題を与えられた。

筑波山　峰の紅葉は色づけど
　戦う今日は　訪う人もなし
今日もまた　飛行機雲の合間より
　筑波の山は　聳え立ちたり

この二首とも私の作で、先生から秀作とされ、学友たちの前で披露されたのを、今でも私は懐しく記憶している。

一空廠では寮に入居し、三カ月間の鈑金・塗装・電装などの基礎訓練を受けた上で、現場に配置された。

仕事は名機ゼロ戦の特攻隊としての爆装（胴体に大量の爆薬を装着できるようにする）であった。あちこちの海軍基地からバラバラに飛来するゼロ戦に爆装をし、次々と送り出す息詰まる業務で、操縦士の多くは二十歳そこそこの紅顔可憐の美少年で、愛機を駆って訪れ、一泊二日くらいで、白いマフラーをなびかせながら、決死の覚悟を潔く担って、三～四人のひそかな、涙の見送りを受けて、所属基地に飛び去るのであった。

米軍の硫黄島上陸（二〇・二・一九）、沖縄本島上陸（二〇・四・一）で、私たちの仕事もにわかに忙しくなったが、「こんなに沢山のゼロ戦があるのに、負ける筈がない」との必勝の信念を抱いていた。

現代の平和で豊かな日本は、あのゼロ戦で散った美少年たちの犠牲の上にあることを、私はひそかに想起している（平成四年二月）。

≪病気のこと≫

シリーズ①　脳卒中って？

脳には大小の血管がくまなく走り、脳の働きに必要な酸素や栄養を送っています。もし血管に異常が生じると、血液がその先に送られず、脳の機能が部分的に失われてしまいます。それが脳卒中です。

血管の閉塞を「脳梗塞」といい、「脳血栓」と「脳塞栓」とに分けられます。脳血栓は、脳の細い血管が狭くなりつまる病気です。脳塞栓は、心臓など脳以外でできた血液や脂肪の塊が、脳の細い血管に流れてきてつまるものをいいます。

出血性のものには、脳の中で出血する「脳出血」と、脳をおおっている〝くも膜〟の下の動脈瘤が破れて出血する「くも膜下出血」があります。

こうした脳卒中は、大発作が突然起こるように思われていますが、それを知らせる前ぶれがあることも少なくありません。

前ぶれ発作の症状は？

①頭痛、めまい、嘔吐
②意識障害
③麻痺
④言語障害

こうした発作は、脳梗塞では睡眠中など、安静にしているときや、朝起きてから二～三時間の間に起こることが多いのです。

また、出血が原因の場合は、昼間仕事をしているときなど、活動中によく起こります。

発作が起きたとき、周囲の人が真っ先にすることは、息がつまらないように気道を確保してやることです。

これらの前ぶれ症状がでた時は、躊躇せず病院で検査を受け、早めに対応して戴き、大切な命を守ってもらいたいと思います。

予防の為の食生活は、塩分を控え、野菜やカルシウム分を多く含む小魚や牛乳などを積極的に摂取していくよう心がけたいものです。

（常盤台外科病院
資料室文献より引用）

会員いんふぉめーしょん

☆ スポット・ライト

♣矢口　照雄（高十四回卒）
週刊現代「課長の椅子」（平成三年十一月十六日号）に颯爽と登場。
現在、株式会社東芝　開発営業第一部部長代理（昭和四十三年入社）
営業の最前線で意欲的に活躍されています。
趣味は大学時代からはじめた尺八そして、東芝・広島時代に覚えた海釣り。
つくば市出身　（関山記）

♥柴崎　敦子さん（高三十二回卒）
バルセロナへ
フジテレビのディレクターをしている高三十二回卒の学年幹事柴崎敦子さんは、同局のニュース番組「ワールドアップリング」の取材のためパリ支局に転勤になった。
短期赴任で、六月までパリに滞在したあと、八月までバルセロナでオリンピックの取材をして帰国する。

※　会員に関する面白い情報、おめでたい情報など何でも結構ですから事務局までお寄せ下さい。

訃　報

同窓で参議院議員の狩野明男氏（昭和二十八年高校五回卒）は二月二十六日午後八時四十三分心不全のため死去しました。
慎んでご冥福をお祈りします。

狩野明男君を偲ぶ

私が彼が何故、政治家の道を歩んだのか、全然知らない。従って私は、彼の親しい友人とは言えないのかも知れない。

土浦一高で知りあい、大学時代はよく一緒に遊んだ。杉並にあった彼の下宿に押しかけ麻雀をやった。夜が明けてしまったことも何度かあった。同宿の小野君、常連の矢口君によく負けていたから博打の才能は無かったようだ。乗馬とかダンスとかカッコイイ部活動に、僻んだ目で彼をみたこともあった。

昭和三十年代後半、お互いに結婚したばかりの頃、義理あって女房と水戸を訪れた。所用を終え、折角水戸に来たのだからと駅から彼に電話をしてみた。「そこを動くなョ」と言って彼は素っ飛んで来てくれた。当時の薄給の身ではとても入れない料亭で夫婦共々ご馳走になった。彼の衆議院時代は殆ど会う機会は無かった。お互いに多忙を極めた年廻りだったのかも知れない。数年前のある夜、彼から我家に電話をもらった。彼の冗談（？）に女房は大笑いしながら、バトンタッチ。大学を卒業した息子さんが、ボランティアの一員として東南アの旅に出る話だった。目を細めてニヤニヤしながらしゃべる時の彼の雰囲気を知っている人は多いと思う。まさにアレだった。終生直らなかった茨城ナマリで、うれしそうに誇らしげなニュアンスもこめられていた。気持わかるよ。成長した息子の旅立ちに彼は輝かしい未来像を実感したのだろう。

今年の一月二十五日、筑波山青木屋に六十五名の土浦一高、二高の同窓生が集合した。彼も顔を出してくれた。六十四名が知っている彼の印象については書く気がしない。翌週の三十一日、私は彼とニューオータニで昼食をとった。彼の選択で網焼きステーキを注文。私の要望でお銚子二本。彼は食事も酒も殆ど口にしなかった。「健康じゃないと意味がないんだョなあー」この彼のセリフが妙に耳に残った。店を出て右と左に別れた。

合掌

（昭和二十八年卒　黒田　常）

本の紹介

『母校讃歌』

――わが青春の土浦一高――
（常陽新聞社刊）

地元の常陽新聞紙上に連載されていた「母校讃歌――わが懐しの土浦一高」を一冊の本にまとめられたものです。
明治・大正・昭和・平成と歴史と伝統の中に卒業生達の当時のエピソードなどが書かれており、手にとるようにわかります。
まだ、お読みになっていらっしゃらない方には是非一読をお薦めします。

東京支部特製テレホンカード

東京支部では懐かしい母校の正面玄関校舎の写真のテレホンカードを作製して会員の方に頒布しております。
ご希望の方は事務局へご連絡下さい。

✤編集後記✤

東京プリンスホテルでの四回目の総会を迎えるにあたり、支部幹事、学年幹事の皆さんが中心になって企画等進めております。
懸案のこの会報の名称も「東進」と名付けさせていただきました。
今後紙面は会員の皆様の声を反映させたいとおもいますので、事務局までご連絡下さい。
最後に支部会員皆様のご健康とご活躍をお祈りします。